

梅

元章作

前

ワキ 藤原何がし

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 梅の精

地は 摂津

季は 春

ワキ詞

「是は五条わたりに住居する藤原の何某にて候。さても我いまだ難波津を見ず候ふ程に。此度一見せばやと思ひ候。

サシ

「津の国の難波の春のゆかしさに。今日思ひ立つ旅衣。日影長閑けき都の空。霞へだゝる山崎や。関戸の宿も名のみにて。戸さゝぬ御代は行きかふ人の。姿さへ実にゆたけしや。

下歌

「こゝは何処ぞ旧年の。木の葉も積る芥川。しばし

ながらの旅心。

上歌

「蘆の若葉のなごはしみ。く。風も音せでよる波の。響はさすが聞きて恋ふ。難波の浦のうらゝなる。春の気色を今ぞ見ん。く。

ワキ詞

「面白や難波の浦の春の気色。里は花咲き匂ひ満ち。遠の山々打ち霞み。青海原は白波の。八重折る上に海士小舟。行きかふ様はいにしへの。家持の卿の詠めまで思ひ出でられて候。桜花今盛なり難波

の海。おしてる宮に聞しめすなへ。今は花いまだ
含みて梅の盛にて候。

シテ詞
「なふく今の歌をば。など誠のまゝに吟じさせ給
ひ候はぬぞ。

ワキ詞
「不思議やな彼歌は。万葉集にありつるを。唯其まゝ
に口ずさみしに。誤りありや覚束な。

シテ
「尤今の冊子には左なんめれど。此歌は家持の卿い
まだ兵部の輔なりし時。公事にて此国にませし程。

二月の十三日よみ給へり。さて三月の三日にふゝめ
りし花の始めに來し我や。散りなん後に都へ行か
んと。春の始め都を出でゝ。今暫しますべきに斯
くよみ給ひしかば。彼二月の中の三日は。梅の花
こそ盛ならめ。其うへおしてる宮に聞し召すなへ
とは。大鷦鷯の天皇の御位に即かせ給ひし事なれ
ば。かたぐいかで桜の歌なるべき。

ワキ
「実に理なり古き書には。文字の違ひのやゝ有れば。

よくわきまへて見るべかりけり。

詞「さてくかくまで分き給ふ。御身は如何なる人やらん。

シテ「いや誰とても理の。まにく聞きめさんには。其人の名は不用ならん。まづく先の御言葉の末に。花いまだ含みて梅の盛と宣ひき。梅の盛は花ならずや。

ワキ「まことに是も誤りなり。何の花をもそのみにて

は。花とのみよめど異花と。ならべていふに桜をのみ。花といふなる古言は。いかで其跡荒磯海。

シテ「浜の真砂はよみぬとも。歌の言葉のかずくは。

ワキ「人の心を種として。よみ出づるなるものからに。

シテ「よも尽きせじな去りながら。

地「うらやすの。安き神代の伝へとて。く。設けでよみ出づる歌の道。直なればこそ鬼神をも。和し向くなれ如何でさる。浮べる古歌のあるべき。

ロンギ地

「聞けばいよく著るき。歌の理木綿四手の。神の示しか有難や。

シテ

「神かとは。うたてはかなき天乙女。たゞ夕風に難波江の。あしやよしやもわきまへで。そよと聞えし恥かしや。

地

「今はさのみな包井の。深き心の底ひなく。聞かまくほしや。

シテ

「さもあらば。

地

「此木の本に下伏して。待たせ給はゞ夜もすがら。月の影もさし出でゝ。朧ながらも慰めんと。梅の陰に入ると見えて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。
(中入)

ワキ歌

「春の夜の。月待ちがての枕さへ。く。取りあへず巻く衣手に。移る其香は隠れなき。闇にもしるき木陰かな。闇にも梅の木陰かな。

後シテ

「月うつる難波の海の夜の波。心もゆたに面白や。

如何に客人此夜らは。空もいとよう晴れ渡り。月の光も昼なして。花の姿もあらはならん。人にな洩らし給ひそとよ。

ワキ「こは如何に有りし女の顔ばせながら。錦の衣玉かづら。斯かる姿は木の花の。精とも今はおもほえず。

シテ詞「知ろしめさねば御理。本より梅の精なれば。唯其をりに従ひて。定まる姿もあらぬ上。舞をかなで、

慰めんと。かくは顕はれ来りたり。

ワキ「先々かしこしさりながら。かたへに人の影もなし。琴笛鼓は誰やせん。

シテ「天にます神のおきての風のまに。松の小枝は琴をしらべ。

ワキ「汀の蘆は。

シテ「笛を吹き。

ワキ「岸打つ波は。

シテ「覆槽の音。

地「おのづからなるものゝ音は。神さぶる此浦の。昔を返す袖ならめ。

地クリ「そもく神代のならはし。草を賤しみ木を貴む。其木の中にかばかりの。形色香の花なければ。梅花をよみして木の花といへり。

シテサシ「さて梅の名はさる花の。咲き出るのみかうるはしき。

地「薬の実さへ結びつゝ。木の肌妙に木立まで。異木に勝れくはしければ。

シテ「うまでふ言を通はせて。

地「梅のその名をゆりたるなり。

クセ「其上神事の。御先に立たす宮人に。取らするも本は此。ずはえに限る事なりき。また御仏の大御法に。幸願ぎ得る事。是もずはえを取りてなり。天皇の。大儀の御場にも。主殿の舍人等が。梅の

ずはえを捧げつゝ。紫の蓋の。頭に仕ん奉れるは。
御先をはらふ由にして。やがて神代のつたへなり。

シテ「初春の。七日の豊明には。

地「舞の台の飾らひに。梅と柳を立てらるゝ。さて木
綿花は古へに。もてはやせしも此花を。とこしへ
に見まほしく。思ひて作りそめにけん。又毎年の
大嘗に。したがふ小忌の人たちも。昔の髻華の心
ばせ。木の花の木を冠の。巾子に添へ立て久方の。

天の日蔭のかづら垂。黒酒白酒の神酒たうべ。千
代万代も限らじと。謡ひ舞ふ其袖を。うつしてい
ざやかなでん。

地「月もおしてゐる難波の浦。
(序の舞)

シテ「鶯の声ものどけき春風に。

地「梅の匂ひや天に満つらん。天に満つらん。く。

シテ「ゆたけしや。何はの事か大君の。

地「恵みに洩れねば草木まで。時をりくを違へずし

て。花咲き実を結び。

シテ
「人民も唯安らかに。

地
「人民も唯安らかに。明くれば暮るゝ。くるれば明
方の。東の山の端匂ひそめて。霞みながらに明け
行くまにく。緑の空にたなびく白雲は。天つ乙
女为天つ楮領巾。撫づともく尽きせぬ巖も。我
君が代のたとしへに足らじな。唯幾久に天地の共
に。栄えまさなんめでたさよ。